
2025年度 学校評価報告書(自己評価・学校関係者評価)

報告者 部長 加藤篤彦

I 自己評価

1. 本校の教育目標

「校訓」 正しく 強く 美しく

2. 本年度の重点目標

1) インクルーシブ教育の推進

「ともに生きていく・主体性を高める」社会情動的スキルの向上をめざす。

2) ASD 児の一貫教育

ライフスタディの(生活单元)のもとで「道徳」を重視する。

→愛情深い教師のもとで、こつこつと学びを積み重ね社会自立を目指す土台を作る。

→わかりやすい楽しい学校づくり。

→幼稚園から小学校、小学校から中学校とつながりを大切にする。

3) 支援体制の構築 支援の充実をはかる

4) 自主性の尊重

→自分で考える。家族や教師と対話して自律する主体的な子どもを育む。

→校則の自由化をはかる。

5) 外部講師による多彩な教育活動の提供

6) 世界を視野にいれた教育体制の整備にむけて

3. 重点目標についての評価(A~D)と取り組み状況や課題

A・・・達成できた B・・・概ね達成できた C・・・達成が不十分 D・・・達成できていない

1) インクルーシブ教育の推進(A)

・今年度から「つながりの時間」を全学年共通に設定した。

この時間は、1年から6年生まで、またA組からE組までを31の小グループで編成して、一緒に活動をするようにした。6年生のリーダーシップの下で皆が楽しめる内容を話し合い、諸活動を通して皆がつながっていく経験を重ねた。

2) ASD 児の一貫教育 (B)

ライフスタディの(生活单元)のもとで「道徳」を重視する。

→愛情深い教師のもとで、こつこつと学びを積み重ね社会自立を目指す土台を作る。

→わかりやすく楽しい学校づくり。

→幼稚園から小学校、小学校から中学校とつながりを大切にする。

各行事の目標を各 ASD 児にとって個別最適化されたものとなるように配慮した。目標達成のための積み重ねも、本人のこつこつとした営みとなるように心がけ、各自が達成感をもてるように対応した。

3) 支援体制の構築 支援の充実をはかる (B)

ASD クラスにおいては、1クラス毎に支援員が配置するようになってきた。きめ細やかな対応ができるようになった。支援の充実においてさらに募集を継続している。

4) 自主性の尊重 (B)

→様々に取り決めをしてきた服装や所持品のルールをなくし自由化をはかった。自分の学校生活で必要なものは自分で考えると共に、家族との対話も促すようにしてきた。自律する主体的な態度が養われてきている。

5) 外部等専門家による多彩な教育活動の提供 (A)

→選択体育を実施(テニス、チアダンス、ダンス:2クラス、総合スポーツ、陸上)した。

一般体育も含めて専門性の高い講師が担当。

選択機会を増やすために、前期と後期にそれぞれ選べるようにした。

→図工では、希望を募って、日本画、油絵のコースも選択できるようにした。

→社会・理科についても専任の講師が担当した。

6) ASD クラスの「ライフスタディ」について (B)

- ・ 子どもたちが社会で生きていくために必要とされる知識や教養を学ぶ時間を確保するようにした。
- ・ 特に小学生の時代に体験したり、学習したりしたほうがよい事項を挙げ、分類して活動をした。

4. 総合的な評価と今後の課題

国際化が進む中で、自国の文化理解は欠かせない。そのために学園では東京国立博物館との連携を締結した。今年度はまず5・6年生の授業として、学芸員が来校しての授業を実施。またその後、国立博物館の場での展示案内をいただいた。今後、1年生から6年生までを見通したカリキュラムを開発していく。

年間計画の中で行事の組み換えを実施した。一例をあげると体育祭では、練習を積み重ねてその成果を発表する行事から、インクルーシブな教育実践から自然に生み出された学年 A~E 組までを一緒にしたチームでゲームを楽しみ、その様子を保護者にご覧いただくようにした。

図書室のリニューアルによってこの場所が単に本を読んだり借りたりする場から広がり、自習や話し合い、あるいはのんびりとくつろぎながら読書を楽しむこともできる開かれた場となった。

さまざまな改善に取り組んだ1年であった。今後は、新しい取り組みが学校生活に馴染んでい

くように定着をはかっていく。

Ⅱ 学校関係者評価

- 1) 行事は例年との変更が大きかったが、年度末の発表会（音楽祭）は、コンパクトな構成で児童の負担が少なく、全学年で相互鑑賞できた点を高く評価する。音楽の専門の方々からの指導を受けられたことで、質の高い音楽表現の発表となり、児童が鑑賞できたこともよかった。子どもの生き生きとした発表と相互刺激を重視する行事教育であった。
- 2) インクルーシブ教育を推進していく中で、保護者も通常クラスの AB 組と ASD クラスの CDE 組での垣根を越えた交流が進んだ。（従来は、どうしても CDE 組内での関係が強くなりがちであった。）加えて、ボランティアをする際にも他学年との連携で視点が広がったとの評価があった。
- 3) 校則の自由化の流れの中で、学校が管理中心から、開放的な学び・交流の場へと変わった。自分で判断すること、わからないことを家庭や学校の先生と相談しながら決めていくことなどは、児童の人生にとっても、重要な経験や学びであると考え。今後も学習・創造活動が活発化していくとよい。
- 4) 夏の校舎改修によって、教育環境が著しく向上したことを評価する。図書室は様々な学びの機会となっているとの報告があり、期待が高い。また、ヨギボー（やわらかい椅子）の導入など、新しい試みがあり、学校としての広がりを感じる。シューズロッカーのデザインも今までの学校のイメージを超えて、登校した時に質感の高い、明るい場所として児童が喜ぶ場となっていることは、とても素晴らしいことだと考える。
- 5) 校庭の全面人工芝生化によって、児童が積極的に外で遊ぶようになったことや運動量の増加はたいへんに好ましい。校庭での児童の笑顔が物語っていると感じる。
一方で、温暖化が進む中で、WBGT（暑さ指数）を測定して外での活動制限をしているとのことだが、そのような環境の中でも児童がのびのびと運動できるよう、校庭での活動を少しでも継続できるように、安全を第一として日よけやクールスポットなどの工夫ができないか研究をしてほしい。